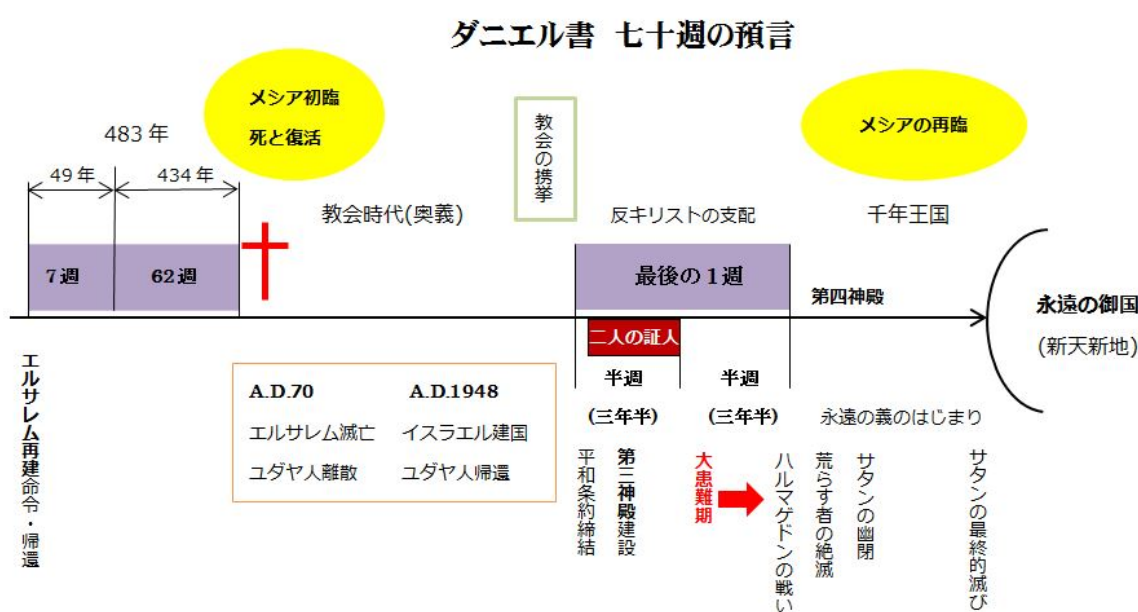


## 七十週目に登場する反キリストの正体

—神のご計画のマスタープランに登場する人物のプロフィール—

### ベレーシート



●先週は、ダニエルの「七十週の預言」の中の最後の1週(第七十週目)に登場する「ふたりの証人」について学びました。彼らはユダヤ人たちの目をメシアに向けるために神から遣わされた伝道者たちでした。今朝は、同じく「第七十週目」に登場する「反キリスト」の正体について学びます。

●「反キリスト」ということばは、聖書ではヨハネの手紙の中にしか出て来ないことばです (Iヨハネ 2:22)。ギリシア語では「アンティクリストス」(ἀντίχριστος)です。クリストスの頭についている「アンティ」(ἀντί)という意味は、「反対する、敵対する」という意味と、「～に代わって」という意味合いがあります。英語では、instead of～ になります。したがって、反キリストとは「キリストに敵対する者」という意味だけでなく、「キリストに代わる者」、あるいは、「キリストの代替的存在」ということになります。ですから、多くの人々から「救世主」として歓迎される存在ともなるのです。

●テサロニケ人への手紙第二では、反キリストは、すべて神と呼ばれるもの、礼拝されるものに反抗して、その上に自分を高く上げ、神の宮の中に座を設け、自分こそが神であると宣言するようになる(IIテサロニケ 2:4)とパウロは述べています。また、反キリストはあらゆる偽りの力、しるしと不思議を行なうとも預言されています (IIテサロニケ 2章参照)。この「反キリスト」の出現は、終わりの時が来たこととしるしとされています (Iヨハネ 2:18)。

●使徒パウロは、この「反キリスト」のことを「**不法の人**」、つまり、「**滅びの子**」と表現しています(Ⅱテサロニケ 2:3)。反キリストは、サタンによって権威と力を与えられた息子的存在で、さまざまな超能力を持って人々を惑わします。ちなみに預言者ダニエルは、これを「**荒らす憎むべき(忌むべき)者**」(ダニエル 9:27)と言い、同じく御子イエスも彼についてそのように語っています(マタイ 23:15)。

## 1. 反キリストは、サタンの子(息子=化身)

●反キリストの正体を知るために、まずは創世記 3 章 15 節を見てみましょう。そこには、アダムとその妻に罪を犯させた蛇に対する神の預言があります。ここは原始福音(聖書における最初の福音)とも言われる所です。

「わたしは、おまえと女との間に、また、おまえの子孫と女の子孫との間に、敵意を置く。  
彼は、おまえの頭を踏み砕き、おまえは、彼のかかとかみつく。」

●文法的には、ここは同義的並行法が取られています。「おまえと女との間」が、「おまえの子孫と女の子孫」に言い換えられています。「子孫」(「ゼラ」 צֵרָא)はどちらも単数形です。つまり、蛇の子孫とは「反キリスト」のことで、女の子孫とは「イエシュア」のことです。ここでわざわざ「女の子孫」と言っているのは、男性と関係なく生まれる子孫です。とすれば、それはやがて処女マリアから生まれるイエシュアを意味します。

### (1) 最初のサタンの策略

●蛇であるサタンにとって、この女の子孫が出現するならば、自分の頭を踏み砕かれることになるので、なんとかその女の子孫の出現を阻止しようと図るのは当然のことです。そこでまず狡猾な蛇であるサタンが計画したことは、人間の子孫を作らせないようにすることでした。そのことを学ぶために、創世記 6 章を開きます。

6:1 さて、人が地上にふえ始め、彼らに娘たちが生まれたとき、

6:2 **神の子ら**は、人の娘たちが、いかにも美しいのを見て、その中から好きな者を選んで、自分たちの妻とした。

6:4 **神の子ら**が、人の娘たちのところに入り、彼らに子どもができたころ、またその後も、ネフィリムが地上にいた。これらは、昔の勇士であり、名のある者たちであった。

4 節のみ【新共同訳】

6:4 当時もその後も、地上にはネフィリムがいた。これは、**神の子ら**が人の娘たちのところに入って産ませた者であり、大昔の名高い英雄たちであった。

●実はこの出来事があって、主なる神はノアとその家族を箱舟に入れて、洪水によって、この地上のすべてをリセットしようとされたのです。

●6 章 2 節にある「神の子ら」とは何者なのでしょう。彼らは、「人の娘たち」と対比されています。とする

と、この「神の子ら」は天的存在です。いわば、墮天使たちです。この墮天使は、人間の娘たちが美しいのを見て、大きな罪を犯します。つまり、人間の娘たちと通じて、子どもを生んだのです。それが「ネフリウム」という力ある者、昔の勇士、巨人たちでした。

●「神の子ら」ということばはヨブ記の1章の天上における会議の場面にでできます。6節「ある日、神の子らが主の前に来て立ったとき、サタンも来てその中にいた。」(ヨブ記 1:6)とあります。地上のヨブの知らないところで、主である神とサタンがヨブのことでやり取りしている場面です。その場面に「神の子ら」がいたのですから、創世記6章の「神の子ら」という言葉も、同じく天的な存在である御使いと言えます。ただ創世記6章の場合の「神の子ら」とは、サタンの支配にある御使い、つまり墮天使です。そしてその墮天使と人間の娘の間に生まれる者がみな「ネフィリム」になるということはどういうことなのでしょう。

●ロバ(雄)と馬(雌)とを掛け合わせると、「驃馬」(ラバ)が生まれます。ロバと馬の両方の良い面を備えた強い家畜です。ところが、この驃馬にはひとつ弱点があります。その弱点とは子孫を残せないということです。墮天使と人間の娘が結婚して生まれた子どもは、子孫を作れないとすれば、サタンと敵意関係を持つことになる女は存在しなくなります。つまり、「女の子孫は、おまえの頭を踏み砕く」という神のご計画はそこで阻止されてしまうのです。このサタンの策略を打ち砕くために、神は心を痛めながら、洪水によって滅ぼし、人類の将来をノアとその家族にゆだねたのです。これが「ノアの洪水」の出来事の背景にあるものです。

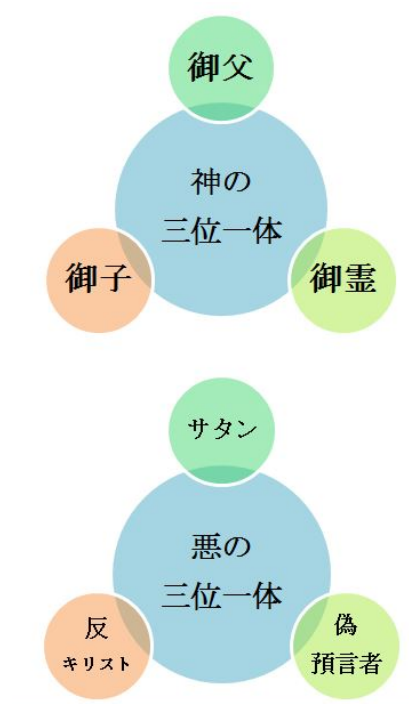
## (2) 神の御子を十字架につけるという策略

●サタンの策略は、やがて「女の子孫」である御子イエシュアを十字架で殺すことによって神のご計画を阻止しようとしませんが、そこでも失敗します。なぜなら御子は死からよみがえられたからです。サタンの策略はかたちを変えながら、何度も何度も歴史の中で繰り返されます(たとえば、反ユダヤ主義、ユダヤ人滅亡計画、置換神学などによって)。しかし、どれもこれもことごとく失敗します。そして、終わりの日におけるサタンの最後の切り札として、サタンの息子ともいべき「反キリスト」をこの世におくるのです。

## (3) 悪の三位一体(サタン、反キリスト、偽預言者)

●右の図は、神の聖三位一体と、それと対比するサタンの悪の三位一体です。御霊が人々をキリストに導かれるように助けると同様に、偽預言者(黙示録 13:11~17)は、反キリストに人々が従うように惑わします。

●ここにある「御子」は「女の子孫」であり、「反キリスト」は「サタンの子孫」です。御子が御父から権威と力が与えられているように、反キリストもサタンから権威と力が与えられているのです。ですから、どちらも超人的な霊的な力をもっています。聖三位一体もゆるぎない絆で結ばれていますが、同様に、悪の三位一体にもゆるぎない絆があります。



## 2. 反キリストによる全世界の支配

### (1) 反キリストの本領を発揮し、自分を神と宣言して拝ませる

●悪の三位一体でのサタンは「竜」という象徴で表わされ、「反キリスト」は「獣」という象徴で表わされます。ヨハネ黙示録 13 章 2 節には「竜はこの獣に、自分の力と大きな権威とを与えた」と記されています。そして、「この獣は、傲慢なことを言い、けがしごとを言う口を与えられ、四十二か月(三年半)活動する権威を与えられた。」とあります(黙示録 13:5)。ただしこの四十二か月は、一週の後半の三年半です。最後の一週(七年間)を「**患難時代**」と呼びますが、特に、後半の三年半は「**大患難期**」と言われます。

#### Ⅱテサロニケ 2 章 2~4 節

2:2 主の日がすでに来たかのように言われるのを聞いて、すぐに落ち着きを失ったり、心を騒がせたりしないでください。

2:3 だれにも、どのようにも、だまされないようにしなさい。なぜなら、まず背教が起こり、不法の人、すなわち滅びの子が現れなければ、主の日は来ないからです。

2:4 彼は、すべて神と呼ばれるもの、また礼拝されるものに反抗し、その上に自分を高く上げ、神の宮の中に座を設け、自分こそ神であると宣言します。

●4 節にある「神の宮」とは、第三神殿がすでに建っていると考えられます。そこに自分の座を設けて、自分が神であることを宣言するのです。それは後半の三年半の「大患難期」の始まりです。しかし注目すべきことは、反キリストがサタンの化身として本領を発揮できるのはわずか三年半だけだということです。とはいえ、人類はこの三年半だけでも、神からの自由を選んで獣を拝んだ愚かさを十分に経験させられることになるのです。

#### 黙示録 13 章 7~8 節

7 彼はまた聖徒たちに戦いをいどんで打ち勝つことが許され、また、あらゆる部族、民族、国語、国民を支配する権威を与えられた。

8 地に住む者で、ほふられた小羊のいのちの書に、世の初めからその名の書きしるされていない者はみな、彼を拝むようになる。

●もし、御霊の証印を押されている者であれば、いのちの書に書き記されており、反キリストが登場してこの世を支配することになったとしても、神がなんらかの形で守られると考えられます。ですから安心しましょう。むしろ、今という時点でイエシュアをキリストと信じる者は無条件に神の子どもとされて、御霊による証印を押されます。

## (2) サタンの「6」という数字に対する愛着

●サタンは自分の化身である反キリスト(獣)を通して、全世界を自分の支配下に置くのです。つまり「獣の独裁政治」となります。偽預言者はこの獣を拝まない者をみな殺させ、すべての人々に、その右手かその額に獣の名、あるいは、その名の数字(666)の刻印を受けさせ、その数字の刻印を持っている者以外は、だれも、買うことも、売ることもできないようにします(黙示録 13:15~17)。つまり、この刻印を受けていないと社会システムの中では生きられないということなのです。しかし、この刻印を受けるといことは、反キリストが神であることを自ら認めたことを意味します。ですから、知らずに刻印を受けていたということはありません。それゆえに、刻印を受けることは神の怒りにふれることとなります。

●ところで、この「666」という獣の数字はとても有名です。何ゆえに「666」なのでしょう。それは、言葉(文字)を数字に変えることで、深い意味をもたせている数の暗号(ゲマトリア)です。

6は、三位一体の第1位格、第2位格、第3位格の数1, 2, 3の合計に等しい数です。かけ合せたものにも等しい数です。  $6=1+2+3$ 、  $6=1\times 2\times 3$

つまり、サタンは明らかに6という数字を用いて、三位一体なる神の真似をしようとしているのです。さらに、イエシュアはサタンを「偽りの父」と呼びましたが(ヨハネ 8:44)、「父」のヘブル語は「アバ」ですが、それをギリシア語表記にすると  $\alpha\beta\beta\alpha$  となり、これを数字に変換すると  $1+2+2+1=6$  となります。

●サタンは「偽りの父」です。神の真似をしようとしているのです。サタンは6や666を好んで用います。たとえば、バビロンの王ネブカデネザルは、金の像を作り、それを拝ませようとしていました。その金の像の高さは60キュビト、幅は6キュビトでした(ダニエル 3:1)。またこの偶像のまわりではさまざまな楽器が演奏されましたが、その楽器の数は6つでした(ダニエル 3:5)。そして、終わりの日の反キリスト(獣)の後半の活動期間である42ヶ月(三年半)も、 $42=6\times 6+6$ で表わすことができるのです。

●「刻印」(「カラグマ」  $\chi\acute{\alpha}\rho\alpha\gamma\mu\alpha$ )ということばは黙示録では7回使われています(13:16, 17/14:9, 11/16:2/19:20/20:4)。この獣の刻印をひとたび受けた者は、決して救われることはできません。彼らはひどい悪性のはれものに悩まされ、やがては火と硫黄で永遠に苦しめられます。しかし、この獣を拝まず、この獣の刻印を押されなかった人たちは、当然、殉教しますが、彼らは千年王国においてよみがえり、キリストとともに千年の間王となることが預言されています(黙示録 20:4)。とすれば、たとえ殉教してでも、獣の側につかないことです。「獣」が現われる時には、多くの人から「救世主」のようにあがめられる存在となります。まさに平和を実現する者として人々から歓迎されます。ユダヤ人の指導者とも七年の平和条約を結びますが、その平和は偽りです。ひとたび「獣」が世界の権力を握ると身を翻して、契約を破り、自らを神とするのです。

## 3. 反キリストの現われの前に携拳がある

●どのようなプロセスで反キリストが現われるか、そのことについてお話ししたいと思います。結論を先に言いますと、反キリストが現われる前に、キリスト者は携拳されるということをお話ししたいと思います。

実は、これから話すことが今回のハイライトです。テキストはⅡテサロニケ 2章です(別のプリント参照)。

●テサロニケの手紙第二が、なぜ書かれたのかと言えば、イエシュアが再び来られること〔すなわち、**キリストの再臨**〕と、私たち〔すなわち、聖徒〕が主のみもとに集められること〔すなわち、**携挙**〕に関して、テサロニケ教会の中に混乱が生じていたからです。換言すると、テサロニケ教会の中に、聖徒を天に引き上げるためのキリストの空中再臨と、大患難期の後に反キリストを滅ぼすために再臨されるキリストの地上再臨とを、混同する者たちが現われたことで、それを明確にするためにパウロはこの手紙(第二)を書いたのです。

●テサロニケの教会に対して、「主の日」がすでに来たということを聞いても、落ち着きを失ったり、心を騒がせたりしないように、だまされないようにしてください、とパウロは言っています。つまりパウロは、「主の日」が来るには、決まった順序があるということを教えようとしているのです。その順序とは、新改訳によれば、

- (1) 「まず背教が起こる」
- (2) 「不法の人(反キリスト、滅びの子)」が現われる
- (3) そして「主の日」、つまりキリストの再臨が来る

●ここで問題なのは、「まずは背教が起こる」と訳されていることです。この「背教」と訳された原語は「ヘ(ἡ)・アポスタシア(ἀποστασία)」です。アポスタシアは、「離れる」を意味する「アポ」と、「立つ」を意味する「ヒステーミ」の合成語で、「離れて立つ」という意味です。ですから、ここは「まず、その離別」と訳すべきだとエマオ出版の山岸登氏は注解しています。「冠詞付の離別」とは、離れる事、すなわち「携挙」を意味しています。それゆえここを「背教」と訳すことは誤りだとしています。ちなみに、新共同訳も「反逆」と訳しています。これも間違いということになります。2章1節に「私たちが主のみもとに集められること」とありますから、ここは「(主の日が来る前に)まずその離別(携挙)があり、その次にあの不法の人、すなわち**「滅びの子」が現われなければならないからです。**」と訳すべきだとしています。「アポスタシア」についてのこの見解は、英訳聖書の翻訳の歴史においも、KJV 訳以来、「離れる」「離れること」と訳されて来た山岸氏は述べています。もしこの見解が正しければ、患難期前再臨(空中再臨による携挙)説の有力な聖書的根拠となります。

●もうひとつ、このことに関する重要な節の理解として、6節と7節があります。新改訳では

6 あなたがたが知っているとおり、彼がその定められた時に現れるようにと、**いま引き止めているものがある**のです。

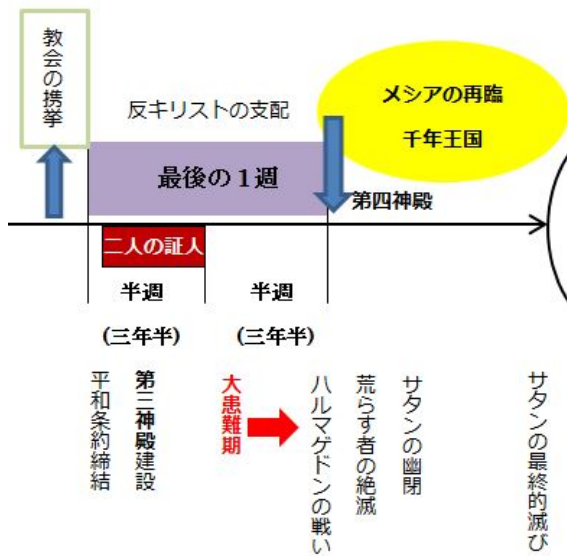
7 不法の秘密はすでに働いています。**しかし今は引き止める者があって、自分が取り除かれる時まで引き止めている**のです。

8 その時になると、不法の人が現れますが、

●上記の太文字でしるされている箇所「いま引き止めているものがある」「しかし今引き止める者があって」「自分が取り除かれる時まで引き止めている」ということばはどういう意味なのでしょう。それは、不法の人が彼に定められている時に姿を現わすのを、引き止めている者があるということです。すでに神に反逆する働きはひそかになされてはいても、それが公然となされるために、引き止めている者がまず取り除かれる。つまり、引き止めているものがその役から身を引かされる時、はじめて恐るべき不法を働く者(反キリスト)が必



ず現われるということです。とすれば、引き止めているのは、**教会のこと**だと考えられます。



#### 4. 反キリストの最期

- 反キリストの最期は、キリストの再臨によってもたらされます。神とサタンの最終決戦の場は「ハルマゲドン」です。「ハル」はヘブル語で「山」の意です。「マゲドン」は「メギド」で、「メギドの山」となります。そこに悪の勢力が最終的に



神と対決するために集結します。しかし、そこで神の最終的な勝利が確定し、千年王国が到来します。メシア王国の実現です。サタンは千年の間、底知れぬところに投げ込まれます。この千年王国の祝福については、時を改めて、学びたいと思います。